

## 人生100年時代の備え 小室淑恵さんに聞く 自分高める意識持って 社外と交流、視野を広く

2018/4/16付 | 日本経済新聞 朝刊

平均寿命が延びる「人生100年時代」を迎え、若者世代の生き方、働き方は親世代とは違ったものになりそうだ。働き方改革のコンサルティングや、ワークライフバランスに関する政府委員などを務め、育児や介護もこなす小室淑恵氏にこれからの働き方について聞いた。

——日本人の平均寿命が今の80代からさらに長寿になると、社会はどう変わっていきますか。

「仕事や育児とか何か一つのことだけに専念するより、複数のことを並行してこなす、（大道芸の）ジャグリングのような能力が求められるのではないのでしょうか」

「人工知能（A I）の進化などで、今は必要とされている技能や職業が10年後、20年後になくなってしまいうリスクが指摘されています。1つの仕事で専門性を極めるというより、複数の仕事や働き方を意識する必要がでてくると思います。さらに長寿になって60歳でリタイアするのではなく、70歳、80歳まで働かなければならなくなると、自分のキャリアを前半戦、後半戦の二毛作ぐらいで考えなくてはいけなくなるでしょう」



□ □

——働くに当たって若者は何を選択の基準とすればよいのでしょうか。

「ソフトウェア開発を手掛けるサイボウズの青野慶久社長と対談したとき、同社を志望する学生が何を重視しているのか尋ねたところ、『（副業可や時間外労働がないといった）時間の選択肢が多いことです』との答えが目立ったと聞き興味を持ちました」

「情報技術（I T）業界の技術革新のスピードを見ればわかると思いますが、もはや1つの技術を習得すれば一生食べていける時代ではありません。常に次世代の技術や他の分野のことを学び続けることが必須になります。そんな厳しい時代に、1つの会社に全ての時間や能力をささげてしまうことは、自らの人生の選択肢を狭めてしまいかねません」

——働き方も変えていく必要がありますか。

「今の20～30歳代は進化するA I とガチンコでぶつかる世代となります。A I に対応できる新しい働き方が必要でしょう。会社に時代遅れになった社員の再教育をする義務はありません。個人が生き残っていくためには、意識して自分を高める時間を作っていないといけませんね」

——自分を高めるにはどうすればいいですか。

「1日の一定時間を継続的にインプット（学び）に充てる必要があるでしょう。机に向かって勉強することだけが全てではありません。私自身は育児や介護経験を通じて世の中の課題を発見したり、視野を広げたりする多くのインプットを得ました。親族の介護にどっぷりつかった際には、ヘルパー2級の資格を取りました。専門家として話ができるようになったことで自分のステージが一つ開けました」

「我が家では朝は夫が育児や食事を担当し、帰宅後は私が担当する、と役割を分けています。夫婦の役割分担で、朝40分は勉強の時間に充てられています。自らが人生の時間をデザインすると同時に、今の自分のコミュニティとは違う新たな所に出て知見を広げるようにすれば、次の時代に通用するでしょう」

□ □

——学生時代にやっておいた方がいいことはありますか。

「働き方にシビアな会社でインターンシップ（就業経験）をしてはどうでしょうか。育児や介護を経験し、中途採用など色々なキャリアを受け入れるなど働き方の選択肢が多い企業で働くことで、人生のロールモデルと接することができます。バイト先などのワーキングマザーや、育児に積極的な夫『イクメン』の家庭を訪問してみると時間をどう使っているかも学べるはずです」

「人脈づくりも大事です。人と人との縁（えにし）を大切にすることです。仕事に直結した人脈だけだと、業界がなくなってしまうえば関係もゼロになってしまいます。華麗に轉身できるようにするためには、意識して社外の人と付き合うことが重要です。交流の時間もスケジュールに入れて習慣にできる人であってほしいと思います」

「どんな企業でも20年たてば大きな変動があるはずです。その変化についていくためには組織に閉じこもらないことが大事です。多くの人は『仕事が忙しいから』と言って関係を断ってしまいがちですが、もったいない話です。自分の世界を閉じていなければ、誰がどう困っているか、自分が社会で困っている人にどうかかわっていけるのかに気付けます」

——若者はどのような人生設計をすればよいのでしょうか。

「かつては大量生産で均質のものをつくってあればよかったのですが、これからは多様なニーズに応えるために、多様なレセプター（受容器）を磨いておかないと対応できなくなります」

「定年後の人生が長くなってくると、仕事人生から急に切り替えた人ほど、地域社会になじみが薄く居場所がないことを痛感することになるでしょう。家族や地域とのつながりに対し、意識して一定の時間を費やす配慮が必要となってくるでしょう」

（流合研士郎）

**こむろ・よしえ** 1975年生まれ。日本女子大卒、資生堂入社。2005年資生堂を退社、06年コンサルティング会社、ワーク・ライフバランスを設立。働き方改革で多くの企業のコンサルティングを手掛ける。内閣府の「男女共同参画会議 仕事と生活の調和に関する専門調査会」委員などを歴任。

**就活の関連情報はこちらへ** 18歳プラス面では就職活動中の大学生の疑問や不安にこたえる記事を掲載しています。関連情報を電子メールdaigaku@nikkei.co.jpへお寄せください。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.